稲本先生の御退官によせて

岡　崎　廉　治（化学教室）

稲本直樹先生は昭和26年東京大学理学部化学科を卒業され，29年東京大学理学部助手になられました。その後同講師，助教授を経て40年に有機化学第一講座の教授に昇任されました。その後25年にわたり，窒素，リン，硫黄，セレン，ケイ素などのヘテロ原子を含む有機化合物の研究を一貫して進めてこられました。今日では，ヘテロ原子化学は有機化学の中で一つの大きな分野に成長して確固とした位置を占めており，第一回のヘテロ原子化学国際会議を日本で開催するほどにこの分野における我国の研究が活発になっておりますが，その流れを身をもって作ってこられた先生には，御退官にあたって感慨深いものがあるのではないかと推察致しております。

先生とともに過した20余年を思いおこしながら，先生のお人柄などについて，二，三ご紹介してみたいと思います。

私が先生に初めてお逢いしたのは，学部三年生の有機化学実験のときであったと思いますが，その後先生が所属しておられたのと同じ研究室（島村研究室）に私も入りましたのでお逢いする機会は多かったはずですが，入りたての大学院生には講師になっておられた先生は雲上人のようで，また先生が寡黙の人であったこともあり，ほとんどお話しをしたという記憶がありません。しかし，大学院の先輩から，稲本先生は島村教授がパトロール（実験室に実験経過などを聞かれるために先生がまわってこられるのを学生はこうよんでいた）中に声をかけても実験に集中しているあまりそれが聞えず，島村教授がすごすごと実験室から出ていかれたなどという話を聞かされて，私や多くの先輩が島村教授がそばにいるだけで緊張して手からフラスコを落しそうになったことを考え，稲本先生の集中力と豪胆ぶりに敬服しておりました。

さて話が急に飛躍しますが，先日昭和天皇崩御の折，さまざまな人達がそのお人柄にふれていた中で，私の印象に強く残ったことがありました。誰であったか失念してしまいましたが，特筆すべき人柄として公平さをあげていました。この小文を書くにあたって稲本先生とともに過した年月の間のさまざまな出来事をふりかえってみて，稲本先生もまた御自身ではこの公平さを最も大切にされていたのではないかということに思い至りました。研究室や学生の教育においてだけではなく，学術雑誌の編集委員長としても，またさまざまな学会活動においても，いつもそれを心がけておられたように思います。これは一見あたりまえのようで，終始それを貫ぬくことは，なかなかできないことのように思います。

先生は一昨年の４月より環境安全センター長を務めておられます。第三代センター長であり，センターの業務も順調に進んでいてあまり大きな問題はないであろうとの大方の予想を裏切って，アスベストの問題が起り，大変苦労されたようにお見受けしました。一応の解決をみたとうかがっておりますが，それも恐らく，持前の公平さで誠実に努力された結果であろうと思っております。

先生の長年にわたる研究と教育に対するご尽力に感謝致しますとともに，御身体を大切にされ新しい職場での益々のご活躍を期待致します。